

司式:橋本 義武
奏楽:吉田千鶴子

前奏:「主イエス・キリストよ、われは定かに知れり」(D. ブクステフーデ)

招詞:平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。(マタ5:9)

讚美歌 351「聖なる聖なる」

交読詩編 13 編

01 【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。】

02 いつまで、主よ/わたしを忘れておられるのか。いつまで、御顔をわたしから隠しておられるのか。

03 いつまで、わたしの魂は思い煩い/日々の嘆きが心を去らないのか。いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。

04 わたしの神、主よ、顧みてわたしに答え/わたしの目に光を与えてください/死の眠りに就くことのないように

05 敵が勝ったと思うことのないように/わたしを苦しめる者が/動揺するわたしを見て喜ぶことのないように。

06 あなたの慈しみに依り頼みます。わたしの心は御救いに喜び躍り/主にに向かって歌います /「主はわたしに報いてくださった」と。

朗読聖書①イザヤ書 25:4-10

◆神の驚くべき御業

04 まことに、あなたは弱者の岩/苦難に遭う貧しい者の岩/豪雨を逃れる避け所/暑さを避ける陰となられる。暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨

05 乾ききった地の暑さのようだ。あなたは雲の陰が暑さを和らげるように/異邦人の騒ぎを鎮め/暴虐な者たちの歌声を低くされる。

06 万軍の主はこの山で祝宴を開き/すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜き酒。

07 主はこの山で/すべての民の顔を包んでいた布と/すべての国を覆っていた布を滅ぼし

08 死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい/御自分の民の恥を/地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである。

09 その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

10 主の御手はこの山の上にとどまる。

朗読聖書②ルカによる福音書 8:49-56

◆ヤイロの娘とイエスの服に触れる女(後半)

49 イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません。」

50 イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」

51 イエスはその家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも一緒にいることをお許しにならなかった。

52 人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。そこで、イエスは言われた。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」

53 人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。

54 イエスは娘の手を取り、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた。

55 すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。イエスは、娘に食べ物を与えるよ

うに指図をされた。

56 娘の両親は非常に驚いた。イエスは、この出来事をだれにも話さないようにとお命じになった。

祈祷

父なる神さま、聖名を賛美致します。私たち、夫々、遣わされた場より呼び集められて、礼拝を献げること許されましたこと、心より感謝申し上げます。私たちの罪を懺悔致します。どうか私たちに御言葉をください。御言葉を取次がれる先生を強め、聴く私たちの耳を開いてください。

神さま、この8月は、特に、戦争と平和のことを覚える時であります。この国の歴史のことを覚え、また現在において、尚も興っている戦争のこと、暴虐のことを覚えます。どうか、希望の見出し難い時にあっても、平和への希望を見出すことが出来ますように私たちを導いてください。

このお祈りを、主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌 382「力に満ちたる」

説教「主の呼びかけ」

鮎川健一

8月も早、半ばを迎え、暦の上では立秋の時期となりました。先週、今週と地震や台風に翻弄されながらも新たな時を迎え、こと日本においては太平洋戦争終戦の日を覚え、今あるを、得ている幸いに、懺悔と感謝の思いを持って迎えている今朝です。

8月の最初の礼拝においては、信仰の戦いの内に置かれている私たちが、主の聖餐の恵みに押し出されて、主によって守られ生かされていることを思い起こしつつ、更なる信仰の道を与えられていることを確認しました。礼拝は祈りと讃美をもって主を仰ぎ、感謝を献げるものですが、最も重要なことは、“信仰をもって主の十字架と復活を覚える”ということにあります。“主が私たち罪人のために十字架の死を遂げ、三日目に死人の内より甦られて、復活の命に勝利した祝福の出来事”を思い起こすものです。私たち信仰者は、“主の十字架の死によって罪の贖いを受け、主の復活に生かされている、その恵みを一步一步、歩む中で頂いている者と自覚して、日々を全うする”ものです。その中で悲惨な出来事が二度と繰り返されないよう“平和と一致の実現を願って”、日本各地、また世界の至る所で祈りが献げられています。今朝は先週の内容を受けて、さらなる主の御教えを聴きます。

少し内容をおさらいしながら先を見ますが、そこには、“主の足もとに会堂長のヤイロという一人の男がひれ伏した”出来事がありました。彼には12歳になる一人娘がいて、この12歳というのは、当時は結婚の話が出るような年齢でした。しかし死にそうになっていたことから、主に“自分の家に来て癒してくれるように願った”というものです。実はこの時、主とユダヤ教の指導者たちの関係は友好的ではありませんでした。会堂長とは、毎週安息日にシナゴグという会堂で守られる礼拝を司る立場にいた人でした。この主イエスと対立しても当然のような人でした。しかしこの時ばかりは、“主の足もとにひれ伏した”というわけです。主は彼の願いを聞き入れました。しかしその途中、“12年間、出血の止まらない女性が主の服の房に触れて、そして癒される”という出来事が起こりました。

今朝は主イエスとその女性とのやり取りが続いている時に、“会堂長の家から人が来て告げた”ところから始まります。会堂長がこの言葉を聞いて何を

思ったのか、そのことは何も記していません。ただ想像と体験に照らし合わせるしかありませんが、おそらくこの時、会堂長ヤイロは何が起きたのか理解できなかったでしょう。これまでの経過から、娘の死を覚悟していたかもしれません。しかし頭で判っていても、心で受けとめることは難しい場合もあります。特に、側近者、愛する者の死ということに関しては、特にそうなります。また、周囲の者が動揺激しくなることもあります。特に事故死や、不慮の死を遂げた時には心の整理がなかなかつかなく、喪失感をかかなりの間、引きずることも多々あります。であれば、この会堂長が知らせを聞いた時には、言葉に表わせないような出来事から頭と心とが混乱していたとも見えます。その混乱を静めるかのようには主は言われます。

「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」と。

会堂長ヤイロを襲った娘の死。その死による混乱と暗い影を追い払うかのように、主は“恐れるな!”と強く告げます。ここには、“死に直面しても死を恐れぬ、死を打ち破る力を持つ方が立っておられる”、ということを知ります。誰もしが戻せない娘の死という現実混乱し、圧倒され、潰されそうになっています。しかしその中で、唯一、主イエス・キリストだけは毅然としています。復活の命、永遠の命を持つが故に死を越える力を備えておられるからです。人々は主の言葉を受け取ることは出来ませんでした。突然の現実を変えられない。人々は主の言葉、「死んだのではない。眠っているのだ。」という言葉聞いて「あざ笑い」ました。人が死んだらなにもない。それは今も昔も、この世の常識になっています。この中に復活はありません。誰も主の言葉をまともに聞こうとはしない。死の圧倒的な力の前に泣き叫ぶ人々は、主を批難して「あざ笑う」。しかし主は告げます。今も告げておられます。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」泣くな。死んだのではない。眠っているのだ」と。それは、これから何が起きるのか、“死が既に敗れている”ということ、“死が全ての終わりではないことを、主はご存じであられる”ということです。

そこで主は「ただ信じなさい。」と言われます。では何を信じるのか。それは、この圧倒的な死の前で、“全能なる神の力、神の憐れみ、死を打ち破り命に至らせることの出来るただ一人の神の子、主イエス・キリストを信じる”ことです。主は、“わたしの力、わたしの命、わたしそのものを信じなさい”と言われます。

死すべき人々の現実には、『復活』という永遠の命をもたらした方を信ずることにより、使徒パウロが伝えたように、この体をもって復活します。使徒パウロはこう伝えました。

「死者は復活して朽ちないものとされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」(1コリ 15:52b-53)、「動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずだ」(同 15:58)と。

聖書をよく読む人は、この言葉を知っています。しかし知っているだけでは力がなく、殊に死を目の前にして、知識でものを申しても真実に生きる力にはなりません。誰もがこの会堂長のように、主の力で何とかして欲しいと思うこともあるでしょう。しかし多くの場合、願いとは別に人は死を迎えます。しかし死の向こうで復活の主が娘の手を取り、「娘よ、起きなさい。」、こう告げられます。この「娘よ」というところに、一人ひとり心に思う人、また自分自身が当てはまります。主は十字架の上で死に、三日目に甦られた。自ら死んでその死を打ち破られた方が私たちの死の向こうに

おられ、私たちの手を取り、愛する者の手を取り、一人ひとりの名を呼んで復活の命を与えて下さるのです。

それは終わりの時に起きます。私たちは先んじてそのことを経験することをも与えられています。それは、礼拝においてです。復活の主を仰ぎ、共に聖餐に与り、霊の交わりを通じ、天上にある者と全ての教会の兄弟姉妹と共に、礼拝者として礼拝を献げることにも恵みを先んじて頂いています。その決定打は“終わりの時”にあります。今朝のイザヤ書を思い起こしますと、イザヤは主イエスと共にある終末の時を預言して告げたのです。こうありました。

「主はこの山で、すべての民の顔を包んでいた布と、すべての国を覆っていた布を滅ぼし、死を永久に滅ぼして下さる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい、御自分の民の恥を地上からぬぐい去って下さる」(25:7-8)と。

ここでの「布」とは、死者を葬るときに遺体に巻かれる亜麻布のことです。なおキリストによる救いは、“死体を巻いていた亜麻布が脱ぎ捨てられ、復活の真実なる究極的な出来事が与えられる”ということを知っています。会堂長ヤイロの娘の復活は、イザヤの預言、そこから主イエスによって全き救いの時が始まったことを示します。神の御子イエスというお方が、死を打ち破る力を持ち、永遠の命を与えて下さる方であることを、この出来事を通じて示しています。

では実際この会堂長ヤイロの娘の復活という出来事は、どこから始まったのでしょうか。実は、“会堂長が主の足もとにひれ伏した時、全ては決まった”と言えます。会堂長は、一心不乱に自分の娘を助けて欲しいとしか思わなかったことでしょうか。これまで敵意を抱いていた会堂長の日頃の立場からすれば、主の足もとにひれ伏した時、自分の全てをこの方の前に投げ出し、委ね、すがった。この紛れもない事実が現れたならば、それが決定打であるということ。主は会堂長の全てを受け取られました。彼の娘の死に対しての恐れも不安も動揺も全てを受け取り、彼を揺るがぬ全き救いへと導いたのです。主は彼と共に家に行き、娘の亡き骸が置かれている所にまで進み、そして復活の場とされました。主は人々の悲しみや嘆きを受けとめ、共に歩み、復活の力をもって一切の涙を拭かれる方です。

私たちは日曜日ごとに礼拝を献げています。それは、この“会堂長の全てを受けとめ、一切の涙を拭かれた方の前にひれ伏し、その方に全信頼を寄せて拝している”ということに他なりません。またそうだからといって強がって、自分は信仰があるから恐れぬ、信仰があるから悲しくない、信仰を持っているから何が来ても大丈夫と思う必要は全くありません。キリストの礼拝、信仰者は願掛けの実践や気合の付与、またなりふり構わず“キリスト命!”と叫び続けるような狂乱じみたことを終始徹底したり、それを確認するために教会に集っているわけではありません。若い人たちにありがちなことですが、“気合いだ! 信仰だ! 祈りだ!”と言ってカツを入れるように不必要に力まなくてもよく、またもしそうならば、信仰から離れることも早いものです。気だけが走ってしまうということです。心とは裏腹に言葉だけが先走るということです。中身がないのです。だからそこで、“気合いだ! 信仰だ! 祈りだ!”と言っても長続きはしないということです。しかもそうやって離れてしまったら、なかなか戻って来ることはありません。たとえ信仰に戻って来たとしても、それこそ終わりの時を間近にしたときに、ようやく戻って来る、ということが多いものです。“若い”ということでの決定打とも言い切れませんが、信仰者であれば誰もが、恐れや不安、悲しみや嘆き、

痛みも苦しみも何も隠さずに、主の御前に差し出すこととなります。“主の御前にひれ伏す”とはそういうことです。

心の奥底を隠しながら主に近づくことは出来ません。それでは礼拝の場にあっても、むしろ他の誰よりも神から一番遠くにいることとなります、それは徹底的に自分中心で、主に明け渡しているとは言えないものです。

“この方の足もとにひれ伏す時、もう全ては解決されている”。私たちの中では何一つ解決されていなくても、この方の中では済んでいる。私たちはそのことを信じる者です。総じて、“この方の御手の中にある”、この解決が私たちの目の前に現れるまで、待たねばならないとしても、既に全てが解決されているというのです。この方こそ、死を滅ぼし、小さく弱者の砦、苦難に遭う貧しい者の砦です。私たちは、信じて告白し洗礼を受けたときから、はっきりとこの方が備えて下さる救いの中にあります。この方こそ旧約の民が待ち望み、神が約束された真の救い主です。主は、「あなたと共におられる(ルカ 1:28)」と告げられたのですから、「安心して行きなさい(マコ 5:34)」、この御言葉を芯から受け止めたいと思います。この世に人間の浅ましい争いが絶えない今にあっても、私たちは先んじて頂いた恵みを無駄にせず、しっかりと復活の主と共にキリストの福音の力に生かされつつ歩んでまいりたいと願います。

祈りを献げましょう

恵み深き主イエス・キリストの父なる御神さま、今朝も上を仰ぎ、祈りと讃美を献げる幸いに感謝致します。私たちはあなたのうちに捉えられ、聖餐の恵みに思いを馳せ、主の十字架と復活を覚えることができ感謝致します。

力の主よ、どうか御言葉に正しく立ち、全てがあなたに向けて為されるものでありますように。

憐れみの主よ、今この時、どんな状況にある者たちにも、あなたが共にいてくださり、御心のままに祈りを聞き挙げてください。

主の平和を願い、救いの確かさを求めつつ、時を同じくして献げられる祈りにあわせ、尊き主の御名によって、御前にお献げいたします。アーメン。

讃美歌 532「やすかれ、わがこころよ」

献金・感謝・主の祈り(勝倉 達)

主なる御神さま、聖日の朝に、あなたの図り知れぬ御憐れみと御慈しみをもって私どもを呼び集められ、この聖堂で、またライブ配信によって主にある兄弟姉妹と共に、御前に出で、共に礼拝を献げる恵みが与えられたことを心より感謝致します。

只今、鮎川先生のお口を通して御言葉に豊かに与ることが出来、感謝致します。今朝“子よ、起きよ!”との会堂長の娘への主の呼びかけを共に聴き、今、私共、あなたによって再びこの世へと遣わされようとしています。私どもがこの一週間、御言葉によって養われ(??)、御霊によって力が与えられ、あなたに従い行く者に相応しく日々を歩むことが出来ますように、あなたの御導きを切に願います。

全ての顔から涙を拭き去り給う神よ、この酷暑の中で病を養っておられる教会員方お一人お一人の上に、あなたが豊かに臨んでくださいますように切に願います。

私どもは必要な物を与えられ、日々を過ごすことが許されておりますことを感謝致します。今、与えられた物の中から感謝と献身の徴として御前にお献げ致しました物を、どうぞ祝して御用のためにお使い下さい。

主が御弟子に教えられた「主の祈り」を共に祈り献げて、新しい一巡りの日々へと歩み出させてくださいますように切に願います。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌：89「共にいてください」

派遣・祝福：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：略

後奏：「天にまします、われらの父よ」(J.S.バッハ)